

# 素顔のアフリカ女性ア・ラ・カルト

ザンジバルのフィールドから

富永智津子

とみなが ちづこ / 宮城学院女子大学キリスト教文化研究所客員研究員、AA 研共同研究員

フィールドで忘れてはならないことは、「女性もそこにいる」ということ。「人間」を見ているといいつつ男性しか見ていないフィールドワーカーは、今でも結構多い。それでは、社会の半分しかわからない!

ザンジバルとは、アフリカ東部沿岸のインド洋上に浮かぶ大小の島々を指している。地図でみると南緯5度から7度の間に位置し、沿岸からおよそ30~40キロの海上に、まるでけし粒のように点在している。

人口は約120万人(2002年)。1964年に、大陸部のタンガニーカと連合し、タンザニア連合共和国となり、現在にいたっている。

私は1980年代から、このザンジバルを歴史人類学的研究のフィールドとしてきた。80年代は、もっぱらインド洋西海域における19世紀の金融ネットワークを調べ、90年代には女性の労働に関する調査を、最近は歴史に名を残した女性の末裔を追いかけてたりしている。

以下は、そんなフィールドワークの中で出会った記憶に残る女性たちの素顔である。

## たくましさと優しさ

ファトゥマは、ザンジバル名うてのフェミニストである。ストーンタウンと呼ばれる都市部のど真ん中のマンションにひとりて住んでいる。壁に飾られた往時の写真を見ると、大変な美女である。今、還暦を過ぎて少々ふと目になったが、その分、カリスマ性が加味され、貫禄がついた。もともとジャーナリストで鳴らした女性である。その縁もあって、国際機関の依頼で、女性の社会調査なども手掛けており、ザンジバルの女性についてなら誰にもひけをとらない知識の持ち主と、自負している。彼女を見てると根っからたくましく強い印象を受ける。そう言うと、「ザンジバルの女性は本土の女性と比べたら、とてもたくましいのよ」という答えが返ってきた。夫を袖にする女性も多いのだという。そういう彼女も離婚経験者だ。だが、夫とは「今でもよい友だち」なのだという。そして、独立したひとり息子をこよなく愛している。

## 大切なのは自立

アシャは、ザンジバルの幾重にも多様な文化を身につけた女性である。皮膚は黒くもなく、白くもなく、アラブ的でもあればインド的でもあり、「笑い」はまさにアフリカ的である。私がアシャに出会ったのは、はじめてザンジバルに足を踏み入れた80年代であるから、それから30年近く、アシャの家族との付き合いは続いている。アシャは言う。「女性にとって一番大切なのは職業」と。家族よりも何よりもまずは職業、と言い切れるアシャを、私は、すごいと思っている。アシャと出会った時、アシャはすでに電信電話局の技師だった。すでにひとり目の子を抱えていたが、それから10年ほどの間に、さらに5人の子どもをもうけた。彼女のすごさはそれだけではない。定職のない夫にかわって、夫の両親と障害を持つ義妹の面倒もみてきた。今では、夫の両親を看取り、子どもたちも成長し、上のふたりはそれぞれ独立した。今の彼女の夢と希望は、他の3人の男の子と、末っ子であるひとり娘に託されている。

ストーンタウンの街角風景。エナメルペイントの絵が路上で売られている。



ザンジバル島の東海岸は、観光客にとっては、まさにこの世の楽園。イタリア資本のリゾートホテルが並ぶ。

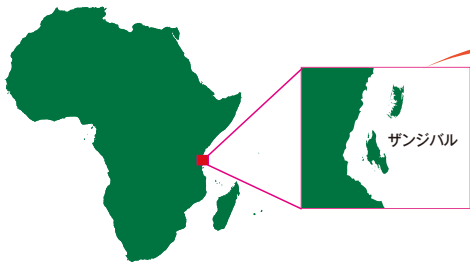


観光客相手に海辺で編み込みの髪を結う女性。インフォーマルビジネスの代表格。



ストーンタウンの夜景。3~4階建の石造りの町並みを彩るステンドグラスが目を惹く。





**はだしの歌姫**

キドゥデさんは、知る人ぞ知るタアラブの歌姫である。タアラブとは、エジプト起源のスワヒリ音楽である。世界のあちこちでコンサートを開き、そのたびに名声を高め、世界的な賞も受賞している。初めてキドゥデさんに会ったのは、これも1980年代。年齢は自称103歳であるが、誰も本当のところはわからない。ザンジバル郊外のアフリカ人居住地区ガンボの薄暗い長屋に、甥や姪と一緒に住んでいた。二度ほど結婚したが、自分の子供はいない。つい2〜3年前、インタビューをしに再びキドゥデさんの家を訪ねた。驚いたことに、当時と少しも変わらぬ長屋に住んでいる。はだして歩きまわっているのも昔と変わらない。イ

ンタヴューの合間にブラジャーからタバコを取り出しては一服する。それが何よりの楽しみらしい。そんなキドゥデさんのプロ根性に触れたのは、ある晩のコンサートの時だった。キドゥデさんの出番はトリと決まっている。ということは午前1時をまわる。なのに、開演時間の午後8時には会場に現れ、じっと出番を待っているのだ。日本円にして200円ほどで新調したという自慢のきらびやかな衣装を身につけ、ピーンと背筋を伸ばして座っている。「歌うことがわたしの仕事、立派な家に住んでぜいたくをするのは性にあわない」。それが、キドゥデさんの変わらぬ生き方である。コンサートはキドゥデさんの迫力ある歌声と大観衆の熱狂ともにお開きになる。

\* \* \*

さまざまな民族が往来したザンジバルには、15世紀以降の都市社会の形成にともない王族を頂点とした階層社会が出現した。その後、ポルトガルやオマーンやイギリスの植民地支配も経験した。しかし、社会の基層には、もともと母系制社会だったバントゥー文化が脈々と今に受け継がれているように私には思われる。その伝統は、長期間夫が家を空ける船乗りや商人の娘が生家にとどまる風習に引き継がれてきたと指摘する研究者もいる。さらに、イスラームの浸透によって、女性は、遺産相続の権利を与えられた。ザンジバル女性のたくましさは、こうした長い歴史過程の中で培われてきたのかもしれない。

キドゥデさんの晴れの舞台。伝統的なタアラブを継承する伝説的の女性歌手。



ストーンタウンのとあるホテルの従業員。素敵な制服について……。この制服は、毎年新しいデザインにチェンジする。



本文に登場するアシャの叔母さん。英語教師をしていたが、今は成人した息子とロンドンで暮らす。



ザンジバルには女性だけの協同組合がいくつもあ。ヤシの葉などでござやバックを製作する女性。



いかにもスワヒリの雰囲気のある女性。日本の青年と結婚。しばらく音沙汰がないが元気であるだろうか。



ストーンタウン近郊には、つぼ作りで生計を立てている村がある。その担い手はすべて女性。